

## スポーツを用いた国際協力 (SDP) の現状に関する スコーピングレビュー

久保 紀明<sup>1</sup>, 遠藤 華英<sup>1</sup>

### A scoping review regarding the present situation of Sport for Development and Peace (SDP)

Norihiro Kubo<sup>1</sup>, Hanae Endo<sup>1</sup>

While sport for development and peace (SDP) has been actively implemented in international cooperation in recent years, the role that sport has played in the context of international cooperation has not been clarified.

In this study, we conducted a scoping review with Google Scholar to systematically clarify what role SDP has played in international cooperation. As a result, it was confirmed that SDP has been implemented to solve various social issues, with NGOs as the main implementers in cooperation with UNICEF and national governments. It was also clear that most of them were aimed at women and children of primary education or above in Africa, and that team sports, represented by soccer, were the main tool.

Team sports have been widely used because of their usefulness in fostering social and emotional skills such as cooperation, self-esteem, and communication. In addition, based on certain results with women and children who belong primary education or above and the recent trend which high-quality preschool education is vital in the educational field, the target of SDP is predicted to shift into preschool children.

SDP has played a role in creating educational opportunities and empowerment of "socially vulnerable people" such as women and children. In the future, it is expected that SDP is aggressively utilized in the field of preschool education and achieves significant results.

**[Keywords]** sport for development, SDP, empowerment, scoping review, international cooperation

近年、国際協力の現場において、スポーツを活用した取り組み (SDP) が積極的に実施されてきた一方で、スポーツが国際協力の文脈においてどのような役割を担ってきたのかについては明らかにされていない。

本研究では、SDP が国際協力においてどのような役割を担ってきたのかを体系的に明らかにするため、Google Scholar を用いてスコーピングレビューを実施した。その結果、SDP は、UNICEF や各国政府協力のもと、NGO が主な実施主体となり、さまざまな社会課題の解決のために実施されてきたことが確認された。また、その多くがアフリカで女性や初等教育以上の子どもたちを対象にしたものであること、サッカーを中心に集団スポーツが主なツールとなっていることも明らかになった。

集団スポーツが広く活用されてきたのは、協調性や自己肯定感、コミュニケーション能力といった社会的・感情的スキルの醸成に有用であることが確認されているからであると考えられる。また、女性や初等教育以上の子どもたちに対する一定の成果と、昨今の教育現場における良質な就学前教育を重要視する潮流を踏まえ、SDP の支援対象は就学前の児童へとシフトしていくと考えられる。

女性、子どもといった「社会的弱者」と呼ばれる人々に対する教育機会の創出やエンパワーメントという役割を担ってきた SDP。今後は就学前教育の現場においても積極的に活用され、大きな成果をあげることが期待される。

**[キーワード]** スポーツ, 国際協力, エンパワーメント, スコーピングレビュー, SDP

## I. 背景と目的

第二次世界大戦後、発展途上国において顕在化している社会課題の解決を援助するためのさまざまな施策が展開されてきた。まず、国際協力の走りとして、1950年代に行われたのが経済開発であった。発展途上国に対して資金援助をする、というようなものであったが、横領等、援助した資金が正しく使われないといった理由から、期待された成果とは程遠いものとなってしまった。そこで、1960年代から1980年代にかけて、国際協力は社会開発へとシフトした。学校や病院といった社会インフラを建設することによって、先進国と同じような社会システムの構築を目的としたものであった。しかし、学校を作ったものの、学校へ通う必要性が理解されない、建物はあるものの、肝心の医師になる知識・技術を持った人が著しく不足していたため病院として機能しなかった、などの要因から十分な結果は得られなかった。これらの失敗を踏まえ先進国は、発展途上国の支援において最も重要なのは「現地の人材を育てる」ことであるとし、人材開発という方向に支援の舵を切った。そして、人材開発のツールのひとつとして、スポーツも活用されてきた。以降現在まで、人材育成に投資するというこの考え方は国際協力の現場において主流なものであり、支援の拡充とともに解決に向かっている問題も増えてきている。

しかし、慈善団体である Theirworld(2022)によると、現状、世界で約2億6000万人の子供たちが学校へ通うことができていること、学校へ通うことのできていない少女のうちの約1億3200万人が暴力の危険に晒されやすくなっていること、障がいを持つ子供たちの約半数が教育現場から排除されていることが報告されている。その解決策のひとつとして、UNICEFのレポート(2019)によると、貧しい国において、正規の取り組みに参加することは、子どもたちが暴力などのリスクに晒される危険性を低減するのに有用であることが示されている。正規の取り組みで活用されているツールは多岐に渡り、スポーツもそのひとつである。同レポート内において、子どもたちに対する教育ツールとしてスポーツは、子どもたちに、自身の行動について責任を持つこと、互いを尊重しあうこと、集団で問題を解決することを教える役割を果たすものであるということが示されている。このように、国際協力及び教育の現場において、スポーツを実践することの重要性、有用性について多くの報告がされている一方で、これまでに実践されてきたスポーツを用いた国際協力プログラム(SDP)の多くの事例について、体系的にまとめられていないという事実がある。

本研究の目的は、国際協力の中で過去に実施された

プログラムについて報告されている文献を分析することで、国際協力の現場において、スポーツがどのように活用されてきたのか、殊に子どもたちへの教育においてどのような取り組みが実施されてきたのかを明らかにすることである。

## II. 方法

### 1. 文献の収集及び分析対象の選定

本研究のレビューでは、文献の選定について主観的な判断のバイアスを可能な限り排除し、研究の客観性を担保するためにスコーピングレビューを実施した。Hilary Arksey and Lisa O'Malley (2005)によると、スコーピングレビューとは、研究対象分野における重要な概念や、主なサンプルや種類についての証拠を明らかにすることを目的とし実施するものである。本研究において、スコーピングレビューは次に示す手順で実施した。

文献の収集については、まず、Google Scholarにおいて、“sport for development” “early childhood” “education”のキーワードの組み合わせを用いた。このキーワードの組み合わせを用いたのは、昨今の教育現場で、提供された教育を子どもたちの将来について効果的なものにするという観点において、良質な幼児教育・就学前教育が極めて重要であるとされているからである。実際、OECDはStarting Strong VIにおいて、好奇心や創造性、あるいは協調性を保ちながら自ら考える力などの、職場において最も価値があるとされるスキルのいくつかについて、幼児期はそれらを養うために最適である、という表現を用い、幼児期の教育の重要性を説いている。また、UNICEFは、子どもの権利とスポーツの原則の中で、スポーツには、子どもの健全で豊かに充ちた成長を促す大きな力と、その影響力の大きさを通じて、世の中に広く積極的なメッセージを伝える力があります、と明言している。これは、教育におけるスポーツの不可欠性を示すものであり、支援活動を通じて社会の変容、社会課題の解決を目指すという文脈において、世の中に強くメッセージを訴えかけることのできるスポーツの国際協力との親和性の高さを裏付けるものである。

文献の内容をより正確に分析する観点から、今回は日本語、もしくは英語で書かれた文献に調査の範囲を限定した。また、発展途上国におけるスポーツを用いた国際協力支援の効果をより正確に測定するため、本研究で検討する文献は、実際のプログラムの効果を検証したものに限定し、政策の提言や、複数の事例についてまとめたものは排除することとした。さらに、書籍やアクセスのできない文献についても除外された。

また、発展途上国内におけるプログラムを対象を限定するために、プログラムが実施された国についても選定基準を設けた。本研究で対象とした国は、次に示す2つの基準に沿って選定された。まず、OECDのODAを受け取っている国についてのリスト(2021)のうち、“Least Developed Countries” “Low Income Countries” “Lower Middle Income Countries” にリストされている国に限定した。それに該当する国の中で、UNICEFの世界子供白書2021において、男子・女子それぞれについての就学前未登録率、男子・女子それぞれについての非就学率(初等教育)の計4項目のうち少なくとも1つ以上の項目で世界平均以上のデータが記録されている国に限定した。また、4項目のうち1つでもデータが公表されていない国についても、教育環境の実態を把握するという観点で望ましい状態にあるとは言えないため、教育における明白な課題があるとして、今回は選定対象とした。その結果、本研究では74カ国が対象国として選定

された(別添資料)。このような選定基準をもうけたのは、全ての国々の中でも、相対的に経済的に貧しく教育に課題を抱えている国を客観的に選定するためである。

先述した基準を遵守し、検索ワードでヒットする文献数405件について精査したところ、レビュー対象として採用されたのは7件であった。また、上記の国々において、社会課題を解決するという文脈においてスポーツがどのように活用されてきたのか、ということについてさらに文献を収集するために、“sport for development” “least developed countries”, “sport for development” “low income countries”, “sport for development” “lower middle income countries” の3つのキーワードの組み合わせについても文献を収集し、先述した基準を遵守して選定を行った。その結果、それぞれ96件のうち3件、257件のうち5件、29件のうち該当なしとなった。つまり、本研究では、計787件の文献のうち、15件がレビュー対象として選定された(図1)。

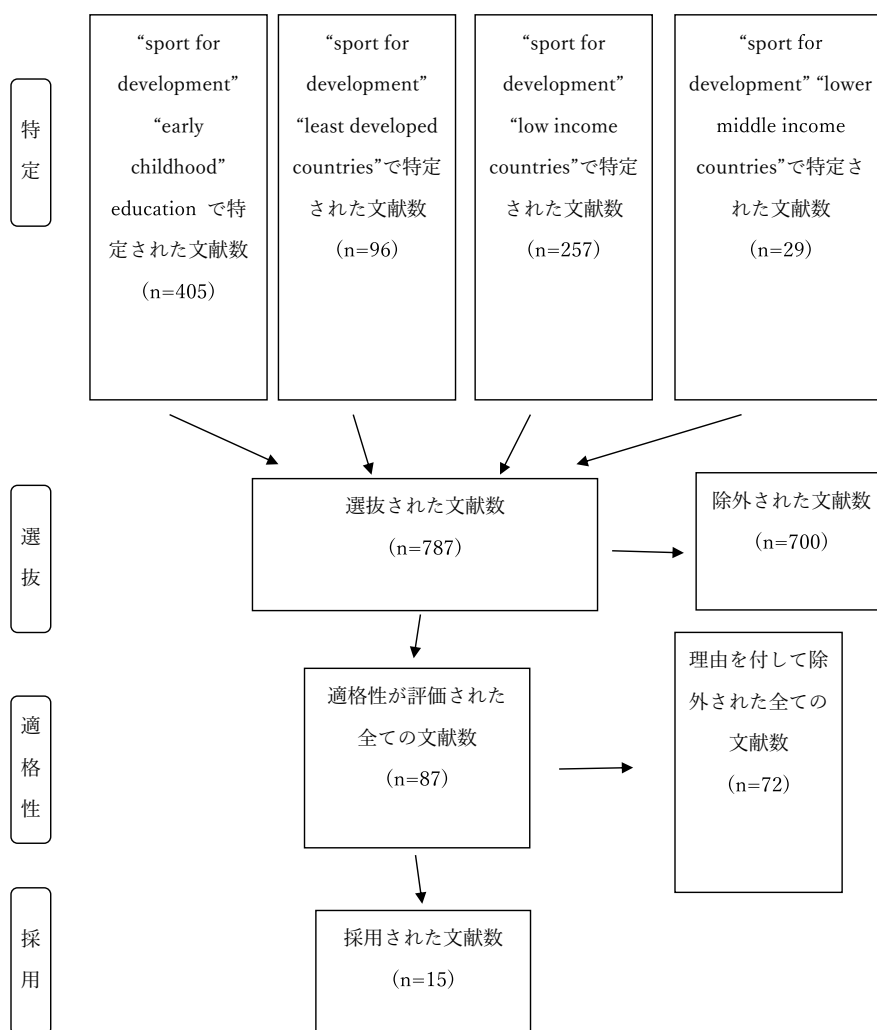


図1 本研究における文献選定過程のフローチャート

## 2. プログラムの分析

本研究では、SDPの現状を明らかにするために、分析対象となった文献のプログラムについて、プログラムの実施主体、対象地域、解決を目指す社会課題、意図、対象者の属性、プログラムで活用されたスポーツの6つの項目にわけて分析を行った。それぞれの項目の設定理由は以下の通りである。

まず、プログラムの実施主体である。実施主体を分析することによって、どのような属性の主体を中心に今日までのSDPが行われてきたのかを明らかにすることができる。プログラムの実施状況を分析する上で、どのような主体によってプログラムが運営されているのかを把握することは必要不可欠である。

次に、プログラムが実施された対象地域である。国連による世界地理区分に従って対象地域を分析することによって、これまでにSDPが行われてきた地域の傾向を明らかにすることができる。対象地域の偏りを把握することで、プログラムが積極的に行われてきた地域、これまであまり行われてこなかった地域を把握することができる。これにより、現在までのプログラムの実施状況における課題の一端を明確にすることができる。

また、プログラムが実施されている国で顕在化している社会課題と、プログラムを実施する意図について分析することも重要である。この2点を分析することによって、どのような種類の社会課題の解決において、どのような意図をもってSDPが活用されてきたケースが多いのかを明らかにすることができる。これによって、SDPと親和性の高い社会課題について明らかにすることが可能になる。

対象者の属性とは、プログラムに参加した被験者の性別や年齢層、特定の境遇や立場、障がいの有無などである。これまでのSDPにおける対象者の属性の傾向を把握することで、どのような人々を支援する際に積極的にスポーツが活用されてきたのかを明らかにする狙いがある。また、先述したように、スポーツが子どもの良質な教育のために非常に有用であるという点を踏まえ、実際に子どもたちを対象とした支援プログラムがどの程度の割合を占めるのかを明らかにする。

最後に、プログラムで実際に活用されたスポーツの種類である。スポーツの種類を把握することで、どのようなタイプのスポーツがSDPにおいて積極的に活用されてきたのかを明らかにする。具体的には、集団で行うものなのか個人で行うものなのか、あるいは、道具を多く必要とするものなのか、全く必要としない、もしくはあまり必要としないものなのか、などである。本研究における「スポーツ」とは、一般的に言われる、競技性の高いスポーツだけでなく、より広範に、遊びや身体活動、体育の授業等も内包する概念として定義する。

## Ⅲ. 結果

### 1. 実施主体

まず、SDPを実施している主体として最も多かったのが、NGOであり、今回のプロトコルの下で分析対象として採用された15件のうちの8件を占めた。次に多かったのは、プログラムの中で活用された競技についての国・地域規模での協会と大学であり、その数はそれぞれ2件ずつであった。その他、政府主導のプログラム、UNICEF主導のプログラム、姉妹の人権活動家主催のプログラムがそれぞれ1件ずつ、という結果になった(表1)。しかし、UNICEFやプログラムが実施されている国の政府については、実施主体ではないがプログラムの実施に協力しているというケースが多かった。

### 2. 実施国

SDPが実施されてきた国について、先述した基準に沿って分類すると、15件のうちの9件がアフリカで実施されたものであった。さらに、そのうちエジプトでのプログラムを除く8件は「サハラ以南のアフリカ」でのものであり、その全てが東アフリカであった。アジアで実施されたプログラムは3件であり、2番目に多かった。アジアで実施された3件のうちの2件が南アジア、残りの1件が東南アジア、という結果となった。また、オセアニアで実施されたプログラムは2件であり、その両方がオセアニアの中でもメラネシアと区分される地域でのものであった。その他、中央アメリカのホンジュラスでのプログラムが1件という結果になった(表1)。

### 3. 社会課題

プログラムが実施されている地域において顕在化している社会課題のうち、最も多かったのは健康状態に関するものであり、その数は8件であった(表1)。さらに、健康上の問題について地域ごとに分類したところ、はっきりとした傾向が現れた。東アフリカにおけるSDPにおいて取り組まれてきた健康に関する社会課題は、4件全てがHIV/AIDSの蔓延であった。また、メラネシアにおいては、今回分析対象となった2件のSDPの両方が、非伝染性疾患(NCDs)についてのものであった。WHOのレポート<sup>9)</sup>によると、NCDsとは、心臓病や脳卒中、糖尿病、癌などの総称と定義されており、世界中における死亡要因の74%を占めるものである。その他、タイでは子どもたちの身体活動量の不足が、ホンジュラスでは栄養失調などを含む健康状態の劣悪さが、社会課題としてプログラム内で報告されていた。

プログラム内で報告されていた社会課題として次に多かったのは、女性の権利に関するもので、その数は3件であった。本研究において、ケニアにおける事例は2件であるが、その両方が女性の社会的な弱さをケニアにおける大きな社会課題のひとつとしていた。

また、何らかの理由による教育現場からの排除、障がい者の排除がそれぞれ2件ずつ報告されていた。教育現場からの排除については地域的な特徴は観察されなかったが、障がい者の排除を報告した事例はいずれも東アフリカのものであった。

#### 4. プログラムの意図・対象群

では、先に述べたような社会課題に対してSDPは、プログラムへの参加を通じて、被験者たちがどのようなことを獲得することによってその改善・解決を図ったのだろうか。

東アフリカを中心に蔓延するHIV/AIDSに対しては、子どもたちに、HIV/AIDSとは何か、どのような行動が感染リスクとなり、感染した場合どのような事態を招くのか、ということをもSDPのプログラムの中で知ってもらい、というアプローチであった。感染原因・感染リスクの高い行為について正しい知識を持つことで、子どもたちが感染危機に晒されるような行動をとることを回避することが意図された。

また、NCDsについては、SDPに参加することによって、被験者の身体活動量が増加することが期待さ

れた。WHOは同レポート内において、喫煙、運動不足、度が過ぎたアルコールの服用、不健康な食生活の4つがNCDsの主な要因であると報告しており、SDPの実施は、このうちの運動不足の解消を狙ったものであった。

さらに、SDPは女性のエンパワーメントにも活用されてきた。現状、多くの発展途上国、殊に家父長制の文化が色濃く残る国々において、女性の権利は抑圧され制限されており、スポーツからの排除もそのひとつである。また、女性の社会的な地位の低さ、立場の弱さも大きな問題であり、性暴力や金銭との引き換えによる早婚などの危険にさらされているという事実がある。このような地域における女性を対象にしたSDPのプログラムは、ただ女性にスポーツへの参加機会を提供することにとどまらず、SDPへの参加を通じて女性同士のコミュニティを築き上げること、家庭内暴力や性暴力等にさらされるリスクを低減すること、あるいはそのような経験によって負った心的外傷やトラウマからの回復を促すこと、といった意図を持って実施された。

以上に示した分析の観点からも分かるように、SDPはそのターゲットの多くが小学校以上の子どもたち、もしくは女性である。さらに、本研究では障がい者を対象としたプログラムも2件報告されている。一方で、本研究においては、就学前教育を対象としたプログラムは確認されなかった(表1)。

表1 これまでのSDPの実施状況一覧

実施国	主体	社会課題	意図	対象群	スポーツの種類
Bangladesh	NGO(バングラデシュ国内)	小学校の退学率	初等教育の完了	教育を完了できなかった人々	体育
Egypt	UNICEF	教育を受ける機会がない	女性のエンパワーメント	農村部の女子生徒(9~12歳)	ハンドボールやバスケットボールに近いルールの遊び
Ethiopia	NGO(エチオピア内外不明)	障がい者のスポーツからの排除	スポーツにアクセスを可能にする	70人の障がい者(女性30名・男性40名)	車いすバスケットボール
Honduras	NGO(ホンジュラス国内)	栄養失調・健康状態の悪さ	健康増進	3つの小学校(335名の生徒)	運動会・野球
Kenya	NGO(ケニア国内)	女性の心的健康	不安の低減・エンパワーメント	18歳以上の女性684名	サッカー
Kenya	NGO(ケニア国外)	男女の不平等	女性のエンパワーメント	81人の女性(10歳~20歳)	サッカー
Malawi	ニューハンプシャー大学(アメリカ)	障がい者の社会的排除	障がい者スポーツの普及	7人のスポーツ関係者	-
Pakistan	姉妹の人権活動家(パキスタン国内)	女性の権利侵害・自殺	女性のエンパワーメント	パキスタンの女性	サッカー
Papua New Guinea	東アジア太平洋国際クリケット評議会	非伝染性疾患(NCDs)	身体活動量の増加	10州の学校の男女	クリケット

Thailand	アルバータ大学 (カナダ)	子供たちの身体活動量の不足	恵まれない子供への遊びの機会の提供	タイの学校に通う子供たち	体育・運動会
Vanuatu	バヌアツクリケット協会	非伝染性疾患 (NCDs)	健康増進・女性のエンパワーメント	バヌアツの女性 (大人のみ)	アイランド・クリケット
Zambia	NGO (ザンビア国内)	若年世代でのHIV/AIDSの蔓延	HIV/AIDSに対する正しい教育	学校内外の子供たち	遊び・フィールドでのゲーム
Zambia	ザンビア政府	若年世代でのHIV/AIDSの蔓延	HIV/AIDSに対する正しい教育	教育セクターに通う男女	体育
Zambia	NGO (ザンビア国内)	若年世代でのHIV/AIDSの蔓延	HIV/AIDSに対する正しい教育	60人の女子	サッカー
Zimbabwe	NGO (ジンバブエ国内)	若年世代でのHIV/AIDSの蔓延	VMMCの奨励	中等学校の男子生徒 (15~19歳)	サッカー

### 5. スポーツの種類

SDPにおいて活用されたスポーツのうち、本研究において最も多かったのはサッカーであり、その数は5件を数えた。サッカーは、東アフリカのみならず南アジアでも使われており、プログラムの対象も、学習年齢期の女子や男子に加え成人女性と多岐に渡った。さらに、明白にサッカーとは記されていないものの、サッカーのドリブル練習などを応用した遊びなどもプログラム内で確認されており、SDPとサッカーの親和性の高さが明らかになった。また、メラネシアで実施された2件のSDPはそれぞれ、クリケット、アイランド・クリケットを採用しており、オセアニア、特にメラネシアにおいてはクリケットがSDPの主要なコンテンツである可能性が示唆された。また、本研究において、個人競技をツールとしたSDPのプログラムは確認されなかった(表1)。

## IV. 考察

以上のことを踏まえ、SDPの現状について以下のようなことが考えられる。

### 1. SDPが実施されてきた地域の偏り

本研究で分析対象となった15件の60%にあたる9件がアフリカでのものであり、20%にあたる3件がアジアでのものであった(図2)。本研究で検討されたプログラムの80%がこのふたつの地域で行われており、一見するとSDPの実施地域には偏りがあるように見られる。SDPの実施地域の偏りについては、Svensson, Per G., and Hilary Woods (2017)による先行研究においても、908件のうち382件がアフリカで実施されたものであり、アフリカが支援対象国として多いことが報告されている。しかし、本研究で先述

した基準に沿って調査対象として選定とされた72カ国(コンボとガザ地区については国連未加盟のため除外)について、国連による世界地理区分に従い、地域別に分類したところ、54%にあたる39カ国がアフリカ、28%にあたる20カ国がアジアに属する国であった(図3)。つまり、調査対象として選定とされた国

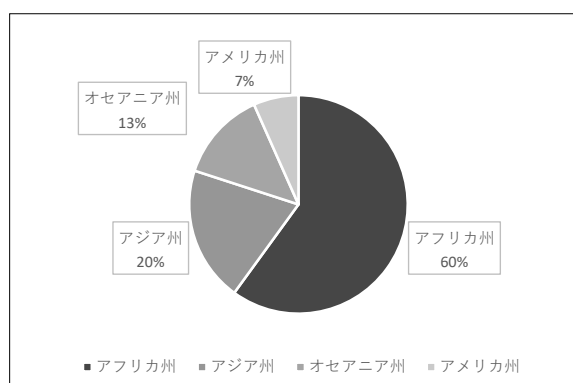


図2 本研究における地域別SDP実施状況  
United Nation, Standard country or area cords for statistical useより筆者作成

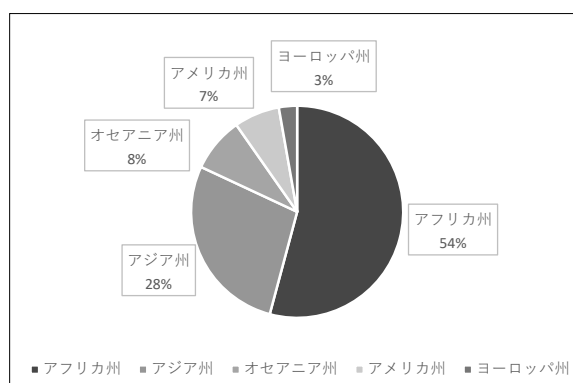


図3 本研究における調査対象国の内訳  
United Nations, Standard country or area cords for statistical useより筆者作成

の82%がアフリカまたはアジアの国であった。したがって、SDPの実施地域について偏りは見られるが、そもそも支援を必要としている国々の所在地域に偏りがあり、SDPは支援を必要としている国々に対して満遍なく実施されているといえよう。

## 2. SDPと健康

分析対象となった事例検証のうち、半数近くにあたる7件が、SDPを実施する大きな目的のひとつとして健康状態の改善を掲げていた。健康状態が好ましくないことが、早急に解決すべき社会課題であることは明白であり、プログラム実施の承認を得る、あるいは実際にプログラムに参加してもらう、いずれのフェーズにおいても、プログラムを実施することによって期待される成果とその重要性を認識できるか否かは非常に大きなポイントとなる。

たとえば、2001年に、当時の国連事務総長であったコフィ・アナン氏は、「HIV/エイズ:行動の呼びかけ」という声明をリリースした。声明の中でアナン氏は東アフリカが、HIV/AIDSの感染率がかつて世界で最も高かった地域であり、現在も非常に高いことに言及した。本研究で扱った健康に関するSDPのうち、東アフリカにおけるHIVに対する取り組み4件は、いずれも2001年以降のものであり、この声明を踏まえ、政府やNGOといったSDPの実施主体が、HIV/AIDSは東アフリカにおいて解決に取り組むべき主要な社会課題のひとつである、と強く認識したためであると考えられよう。

一方で、たとえ用意されたプログラムがどれほど優れたものであっても、その意義が理解されないことには実施するところまで辿り着けない、仮にたどり着けたとしても、参加者が集まらなければプログラムとして成立しない。つまり、SDPを実施する上で、支援によって期待される成果と重要性が理解されることは、プログラムの成否において非常に重要な要素になるといえよう。

## 3. 集団スポーツの有用性

本研究において分析対象となった事例の全てで、複数人が参加するスポーツが活用されているのには、次のような理由があると考えられる。重要なことは、集団スポーツが社会的・感情的スキル(Social and Emotional Skills)の獲得に効果がある、という点である。OECDはSocial and Emotional Skillsにおいて、社会的・感情的スキルを「自身の思考、感情および振る舞いについて分別をもつ能力」と定義し、オープンマインド、課題を遂行する能力、自制心、外向性、協調性の5つを、社会的・感情的スキルを構成する主要

な要素としている。OECDはこの能力について、生涯を通じて個人的・社会的な結果の広範な点に影響するものであるとし、社会的・感情的スキルの重要性を説いている。

その上で、夏原・加藤(2017)において集団スポーツは、この5つの構成要素のうち、特に自制心や協調性を育むのに効果的であることが報告されている。また、本研究でも扱った、Barchi, F., et alによる、ケニアのNGOであるThe Nikumbuke Projectについてのレポートでは、成人女性がサッカーリーグに参加することによる女性のエンパワーメントが図られ、サッカーリーグへの参加を通じて協調性に加え、見ず知らずの人々と友好関係を築くという外向性や、互いに情報を交換するといったオープンマインドについての成果も報告されている。

また、サッカーを用いたプログラムが多数存在するのは、単に世界的に人気の高いスポーツであるからという理由だけではないと考えられる。実際、複数の文献においてサッカーの他に、バスケットボールやハンドボールとそれらに似た独自の競技について言及があった。これらの競技に共通することは、ボール1個と、ゴール(またはその代替となるもの)さえあれば実施することができるという点である。必要となる道具が少ないということは、少ない予算で実施できる可能性が高いということである。本研究において調査対象国とした国々は、発展途上国の中でも相対的に貧しい国々であるため、限られた予算の中で実施できる、参加できるプログラムか否かは非常に重要な要素となっていたといえよう。

以上のことから、SDPにおいて集団スポーツ、殊に道具をあまり必要としないものを活用するのは、極めて合理的なことであるといえよう。

## 4. 幼児教育への活用の可能性

先述したように、本研究の範囲においては就学前児童や幼児教育そのものに対するSDPの事例は確認されなかった。たしかに、就学前年齢の子どもたちは好奇心旺盛で多感であるため、プログラム内で特定のことを長い期間実施し続けた結果による成果であると断定するのが難しい、という側面が存在する。さらに、子どもを対象としたプログラムを実施する場合に、親の理解を得ることが大きな障壁となっている。なぜなら、就学前の時期からスポーツに取り組むことがなぜ重要なのか、ということはまだ知らない親が多い、という現状があるからである。これらが、幼児教育を対象としたSDPが少ない要因の一部であると考えられる。一方で、夏原・加藤(2017)において、幼少期からスポーツに取り組むことが、社会的・感情的ス

キルを養うためには望ましい、と提言されているのははじめ、幼児教育におけるスポーツの有用性は多数報告されている。言うまでもなく、就学前教育は良質な教育サイクルを生み出すために必要不可欠である。なぜなら、質の良い就学前教育が質の良い初等教育を生み、質の良い初等教育の上に高度な中等教育や高等教育が成り立っているのは自明のことだからである。女性や初等教育以上の年齢の若者に対する SDP が定着しつつある中で、先述したような状況を鑑みると、今後はより低い年齢、つまり就学前年齢の子どもたちを対象とした SDP が増えていくと考えられる。

## V. 結論

本研究の目的は、国際協力の現場において、スポーツがどのような形でどのような目的で活用されているのか、殊に子供たちに対してどのような取り組みが実施されてきたのかを明らかにすることであった。

このリサーチクエスションを解くために、今日までの SDP について、実施国、実施主体、顕在化している社会課題、プログラムの意図、対象群、スポーツの種類、項目について分析を行った。その結果、次のようなことが浮上した。

まずは、SDP が支援を必要としている地域において偏りなく行われていることである。このことから、SDP がある特定の地域でのみ行なわれているプロジェクトではなく、世界的に国際協力の主要な手段のひとつとして認識され、活用されていることが示された。

次に、健康に関する施策として、SDP が活用されるケースが多いことである。このことから、スポーツと健康の結びつきの強さ、国際協力の被支援国における、健康状態の改善を求めるニーズの大きさが明らかになった。

また、集団スポーツと SDP の親和性の高さについてはさまざまな研究で報告されていたが、本研究で分析対象となった 15 件全てが集団スポーツを活用したものであったという事実は、集団スポーツが SDP と親和性が高い、という従来の研究結果をより明白なものにした。

さらに、幼児教育において SDP が活用されているケースが乏しいことも、本研究において扱った事例において、就学前年齢の子供を対象としたプログラムがひとつもなかったことによって裏付けられた。その上で、女性や初等教育以上の子どもたちに対して、SDP が普及しつつある現状と、幼児教育におけるスポーツの有用性から、今後、SDP のメインとなる対象群が就学前年齢の子どもたちへと変化していく可能性が示唆された。

つまり、SDP は現在まで、支援を必要としている地域の間で偏りなく、サッカーをはじめとする集団スポーツをツールとして、発展途上国における健康上の問題の解消・解決という役割を中心に、女性や初等教育以上の子供、障がい者といった「社会的弱者」への教育機会の提供及びエンパワーメントにも活用されてきたことが明らかになった。その上で今後は、一定の成功を収めてきた SDP が就学前年齢の子どもたちや幼児教育を対象とした支援の場においても普及することが期待される。本研究で言及してきたさまざまな社会問題全ての背景にあるのは「貧困」であり、貧困は何世代にも渡って連鎖するものである。貧困の連鎖を断ち切り、貧困を打破するためには、教育機会そのものの提供と質の良い教育内容が不可欠であり、SDP はその両方にポジティブな影響をもたらすことが期待される。なぜなら、SDP には先に示したように、社会的弱者の人々に対する教育機会の提供やエンパワーメントを実現してきた実績があり、質の良い教育の土台となる幼児教育において、良質な幼児教育のためにスポーツが欠かせないコンテンツのひとつである、ということも示されているからである。

## VI. 研究の限界

本研究の限界としては、以下の点が挙げられる。

まずは、文献選定である。今回の文献選定においては、Google Scholar での検索の段階でヒットしていた事例集について全て除外したため、掲載されている事例の出典元の文献は、調査対象に入っていない。また、書籍についても除外した。したがって、今後は、この 2 種類のいずれかに該当する文献についても全て考慮した研究がデザインされることが望ましい。

次に、調査の範囲が日本語と英語の文献のみである。国際協力の場においては、旧宗主国と旧植民地の間でプログラムが行われることも少なくない。旧宗主国の中には、フランスに代表されるように英語を第 1 言語としない国も存在する。したがって、フランス語やその他の言語で執筆された文献の中で、今回の条件を満たすものがある可能性は否定できないため、今後は全ての言語を対象にした研究が期待される。

## 引用参考文献

- Amundsen V. L.; Sport, physical activity and development: perspectives and challenges., Diss., 2019.
- Barchi, F., et al.; Improving adult women's emotional health in rural Kenya through community soccer and the role of social support: A mixed-methods analysis., Journal of Sport for Development, 2022.



- Be M. S. Y; The Working Elements of Moving the Goalposts: Football, Peer-education and Leadership in Kenyan Girls., MS thesis, 2015.
- Bhauti K et al.; Voluntary medical male circumcision uptake through soccer in Zimbabwe, 2016.
- Cowie, Robyn P.; Project Jugamos" Let's Play": designing and implementing sport for development programs in impoverished rural regions., Diss. School for International Studies-Simon Fraser University, 2009.
- Craig P. J., et al.; Using inclusive sport for social change in Malawi, Africa., *Therapeutic Recreation Journal* 53.3, pp. 244-263, 2019.
- El L, Weaam M. M; Girls' empowerment through sports: Sports and physical activity with life skills., 2016.
- Farrell J. A.; Sport as a vehicle for development in Vanuatu: a review of the literature and analysis of the Women's Island Cricket Project.a research project presented in partial fulfilment of the requirements for the degree of Masters of International Development, Development Studies, Massey University, Palmerston North, New Zealand., 2014.
- Hanrahan S, et al.; Participants' physical activity levels and evaluations of a school sport programme in Papua New Guinea., *European Physical Education Review* 25.1, pp. 3-20, 2019.
- Hilary A and Lisa O.; Scoping studies: towards a methodological framework., *International journal of social research methodology* 8.1., pp.19-32, 2005.
- Hossain M.R; Role of NGOs in primary education within the GO-NGO collaboration framework: the case of BRAC in Madaripur., Diss. BRAC Univeristy, 2016.
- Hussain, U, et al.; From the eyes of the beholders: the Shimshali sisters., *Sport in Society*, pp. 1-18, 2021.
- 国際連合広報センター, 「HIV/AIDS: 行動の呼びかけ」 [https://www.unic.or.jp/news\\_press/features\\_backrounders/1300/](https://www.unic.or.jp/news_press/features_backrounders/1300/) (最終閲覧日 2022年12月13日)
- Madelaine D, and Patrizia F.; UNICEF Office of Research–Innocenti., UNICEF: Florence, Italy., 2019.
- Mojtahedi M. C, Hisayo K; Making the right real! A case study on the implementation of the right to sport for persons with disabilities in Ethiopia, *Sport in Society* 21.1, pp.40-49, 2018.
- Mwansa K; Sport for Development: Addressing HIV/AIDS in Zambian Underserved Community Schools through Sport and Physical Education Programmes: an analysis of the contextual realities of programme participants., MS thesis, Høgskolen i Oslo. Avdeling for lærerutdanning og internasjonale studier, 2010.
- 夏原隆之, 加藤貴昭; 児童期および青年期の子どもにおける非認知スキルの発達とスポーツ活動との関連性に関する研究, 笹川スポーツ研究助成研究成果報告書 (Sasakawa sports research grants), pp. 293-299, 2017.
- Njelesani D; Preventive HIV/AIDS education through physical education: Reflections from Zambia., *Third world quarterly* 32.3 pp. 435-452, 2011.
- OECD, DAC List of ODA Recipients Effective for reporting on 2021 flows, <https://www.oecd.org/dac/financing-sustainable-development/development-finance-standards/DAC-List-ODA-Recipients-for-reporting-2021-flows.pdf> (最終閲覧日 2022年12月13日)
- OECD, Social and Emotional Skills, [https://www.oecd.org/education/school/UPDATED%20Social%20and%20Emotional%20Skills%20-%20Well-being,%20connectedness%20and%20success.pdf%20\(website\).pdf](https://www.oecd.org/education/school/UPDATED%20Social%20and%20Emotional%20Skills%20-%20Well-being,%20connectedness%20and%20success.pdf%20(website).pdf) (最終閲覧日 2022年12月13日)
- OECD, Starting Strong VI, <https://www.child-encyclopedia.com/sites/default/files/2021-10/starting-strong-VI.pdf> (最終閲覧日 2022年12月13日)
- Svensson, Per G., and Hilary W; A systematic overview of sport for development and peace organisations., *Journal of Sport for Development* 5.9., pp. 36-48., 2017.
- Theirworld, web ページ, <https://theirworld.org> (最終閲覧日 2022年12月13日)
- Truong S. H; A critical ethnography of sport for development in Thailand: Building community partnerships through sport and play., Diss. University of Alberta, 2007.
- UNICEF, 世界子供白書 2021, pp. 76-79, [https://www.unicef.or.jp/sowc/pdf/UNICEF\\_SOWC\\_2021.pdf?221208](https://www.unicef.or.jp/sowc/pdf/UNICEF_SOWC_2021.pdf?221208) (最終閲覧日 2022年12月13日)
- UNICEF 「子どもの権利とスポーツの原則」 <https://childinsport.jp> (最終閲覧日 2022年12月13日)
- United Nations, Standard country or area codes for statistical use <https://unstats.un.org/unsd/methodology/m49/#georegions> (最終閲覧日 2022年12月13日)
- WHO, Noncommunicable diseases [https://www.who.int/health-topics/noncommunicable-diseases#tab=tab\\_1](https://www.who.int/health-topics/noncommunicable-diseases#tab=tab_1) (最終閲覧日 2022年12月13日)

## 別添資料

ODA Recipients (Least Developed)	ODA Recipients (Low Income)	ODA Recipients (Lower Middle Income)	就学前未登録率：世界平均は27(男)	就学前未登録率：世界平均は27(女)	非就学児率(初等学校)：世界平均は7(男)	非就学児率(初等学校)：世界平均は9(女)
<b>Afghanistan</b>			-	-	-	-
		<b>Angora</b>	<b>31</b>	<b>39</b>	-	-
		<b>Armenia</b>	<b>52</b>	<b>50</b>	<b>9</b>	<b>9</b>
<b>Bangladesh</b>			-	-	-	-
<b>Benin</b>			15	16	3	<b>10</b>
<b>Bhutan</b>			<b>58</b>	<b>59</b>	5	2
		Bolivia	9	8	5	5
<b>Burkina Faso</b>			<b>81</b>	<b>81</b>	<b>21</b>	<b>22</b>
<b>Burundi</b>			<b>52</b>	<b>50</b>	<b>9</b>	6
		Cabo Verde	19	19	6	7
		<b>Cameroon</b>	<b>56</b>	<b>57</b>	4	<b>13</b>
<b>Canbodia</b>			<b>48</b>	<b>44</b>	<b>9</b>	9
<b>Central African Republic</b>			-	-	-	-
		<b>Congo</b>	<b>71</b>	<b>70</b>	<b>15</b>	<b>16</b>
		<b>Côte d'Ivoire</b>	<b>78</b>	<b>78</b>	2	8
	<b>Democratic People's Republic of Korea</b>		-	-	-	-
<b>Djibouti</b>			<b>85</b>	<b>88</b>	<b>32</b>	<b>35</b>
		<b>Egypt</b>	<b>63</b>	<b>63</b>	-	-
		<b>El Salvador</b>	18	17	<b>14</b>	<b>13</b>
<b>Eritrea</b>			<b>73</b>	<b>73</b>	<b>45</b>	<b>50</b>
		<b>Eswatini</b>	-	-	<b>15</b>	<b>17</b>
<b>Ethiopia</b>			<b>62</b>	<b>64</b>	<b>11</b>	<b>18</b>
<b>Gambia</b>			<b>42</b>	<b>36</b>	<b>19</b>	<b>10</b>
		<b>Georgia</b>	-	-	2	2
		Ghana	14	12	1	0
		<b>Guatemala</b>	16	16	<b>11</b>	<b>10</b>
<b>Guinea</b>			<b>57</b>	<b>60</b>	<b>15</b>	<b>29</b>
<b>Guinea-Bissau</b>			-	-	-	-
<b>Haiti</b>			-	-	-	-
		<b>Honduras</b>	24	22	<b>11</b>	<b>14</b>
		<b>India</b>	-	-	3	1
		Indonesia	8	2	3	8
		<b>Jordan</b>	<b>55</b>	<b>55</b>	<b>18</b>	<b>19</b>
		<b>Kenya</b>	-	-	-	-
<b>Kiribati</b>			-	-	-	-
		<b>Kosovo</b>	-	-	-	-
		<b>Kyrgyzstan</b>	11	10	-	-
<b>Lao People's Democratic Republic</b>			<b>31</b>	<b>30</b>	<b>8</b>	9
<b>Lesotho</b>			<b>58</b>	<b>57</b>	3	2
<b>Liberia</b>			21	21	<b>22</b>	<b>21</b>
<b>Madagascar</b>			<b>40</b>	<b>38</b>	-	-

<b>Malawi</b>			-	-	-	-
<b>Mali</b>			<b>53</b>	<b>57</b>	<b>38</b>	<b>44</b>
<b>Mauritania</b>			-	-	<b>25</b>	<b>21</b>
		<b>Micronesia</b>	<b>30</b>	<b>34</b>	<b>9</b>	<b>11</b>
		<b>Moldova</b>	5	5	<b>9</b>	<b>11</b>
		Mongolia	3	5	2	3
		<b>Morocco</b>	<b>31</b>	<b>39</b>	2	3
<b>Mozambique</b>			-	-	1	4
<b>Myanmar</b>			<b>88</b>	<b>88</b>	-	-
Nepal			9	17	-	-
		<b>Nicaragua</b>	-	-	-	-
<b>Niger</b>			<b>76</b>	<b>76</b>	<b>37</b>	<b>45</b>
		<b>Nigeria</b>	-	-	-	-
		<b>Pakistan</b>	-	<b>14</b>	-	-
		<b>Papua New Guinea</b>	<b>28</b>	<b>29</b>	4	<b>10</b>
		Philippines	14	13	3	3
<b>Rwanda</b>			<b>48</b>	<b>47</b>	6	6
<b>Sao Tome and Principe</b>			<b>49</b>	<b>46</b>	6	6
<b>Senegal</b>			<b>85</b>	<b>83</b>	<b>30</b>	<b>21</b>
<b>Sierra Leone</b>			<b>58</b>	<b>57</b>	2	2
<b>Solomon Islands</b>			<b>36</b>	<b>33</b>	<b>9</b>	4
<b>Somalia</b>			-	-	-	-
<b>South Sudan</b>			<b>78</b>	<b>81</b>	<b>58</b>	<b>67</b>
		<b>Sri Lanka</b>	-	-	2	3
		<b>Syrian Arab Republic</b>	<b>60</b>	<b>61</b>	<b>27</b>	<b>28</b>
		<b>Tajikistan</b>	<b>87</b>	<b>88</b>	1	2
<b>Tanzania</b>			<b>45</b>	<b>42</b>	<b>15</b>	<b>12</b>
<b>Timor-Leste</b>			<b>51</b>	<b>48</b>	7	3
Togo			1	7	2	4
		<b>Tokelau</b>	<b>20</b>	-	-	-
		<b>Tunisia</b>	-	-	-	-
<b>Tuvalu</b>			13	9	<b>13</b>	<b>17</b>
<b>Uganda</b>			-	-	6	3
		<b>Ukraine</b>	-	-	<b>9</b>	7
		<b>Uzbekistan</b>	<b>53</b>	<b>55</b>	0	2
		<b>Vanuatu</b>	<b>38</b>	<b>38</b>	<b>8</b>	7
		<b>Viet Nam</b>	-	0	-	-
		<b>West Bank and Gaza Strip</b>	<b>35</b>	<b>34</b>	3	3
<b>Yemen</b>			<b>96</b>	<b>96</b>	<b>10</b>	<b>21</b>
<b>Zambia</b>			-	-	<b>17</b>	<b>13</b>
	<b>Zimbabwe</b>		<b>60</b>	<b>58</b>	-	-

OECD, DAC List of ODA Recipients Effective for reporting on 2021 flows., UNICEF, 世界子供白書 2021. より著者作成